

教職課程履修学生の教育観に関する研究

——特に、「履修動機」と「教育実習」について——

和田 美知子
佐藤 嘉晃
藤田 圭一

I. 研究の目的

教員免許法の改正により、平成10年度入学生から、中学校の教員免許状の取得に4週間の教育実習が課せられるようになった。本年度は平成10年度に入学した学生が4年生になったので、本研究では、4週間の「教育実習」を終了した学生の意識構造について分析することにした。また、教職課程の勉強を始めたばかりの2年生を統制群として、意識構造の違いを比較検討する。

II. 研究の方法

1. 調査対象者

本研究の調査対象者は、埼玉県内の大学で教職課程を履修している学生259名である。調査対象者の4年生109名（男子73名、女子36名）のうち、教育実習を終了しているのは103名であり、2年生は150名（男子114名、女子36名）である。なお、以下の分析では、4年生をA群、2年生をB群とする。

2. 調査材料

本研究で用いた調査材料は、以下の4種類である。

(1) 教職課程履修の動機について

(a) 『あなたが教職を履修した理由は、何ですか?』という設問に対して、「1. 教師になりたい」「2. 教えるのが好きだ」「3. 取れる資格は取っておきたい」「4. 将来、何かの役に立つかもしれない」「5. 教職の勉強に関心があった」「6. その他」という6つの選択肢を用意した。

(b) 『あなたが「教職課程」を履修した動機（理由）は何ですか。次の項目について、回答欄の当てはまる数字に○印をつけてください。』という設問について25項目（表1参照）を示し、それぞれの項目について、「非常に当てはまる」「当てはまる」「どちらともいえない」「当てはまらない」「全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。

(2) 教員採用試験の受験の意志について

『あなたは、教職に就くために、教員採用試験（公立・私立）を受けますか?』という設問に対して、「1. ぜひ教職に就きたいので、教員採用試験を受ける」「2. できれば教職に就きたいので、教員採用試験を受ける」「3. あまり教職に就きたくはないが、教員採用試験を受ける」「4. 教員採用試験を受けるつもりはない」という4つの選択肢を用意した。

(3) 教育実習終了後の意識について

『「教育実習」を終えて、あなたはどのような感想を持ちましたか。次の項目について、回答欄の当てはまる数字に○印をつけてください。』という設問について25項目（表2参照）を示し、それぞれの項目について、「非常にそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」「全然そう思わない」の5件法で回答を求めた。

3. 手続き

調査は、2001年（平成13年）6月下旬～7月上旬にかけて集団で実施した。

III. 結果と考察

1. 教職課程履修の動機について

(a)教職課程を履修した動機について6つの選択肢を用意し、適するものを選んで回答してもらった。なお、1つ～3つが選択されたため、A群の回答総数は128、B群は172となった。

集計の結果、A群では「1. 教師になりたい」46.1%、「4. 将来何かの役に立つかもしれない」21.9%、「3. 取れる資格は取っておきたい」13.3%、「5. 教職の勉強に関心があった」10.9%の順であった。B群では「1. 教師になりたい」39.0%、「3. 取れる資格は取っておきたい」・「4.

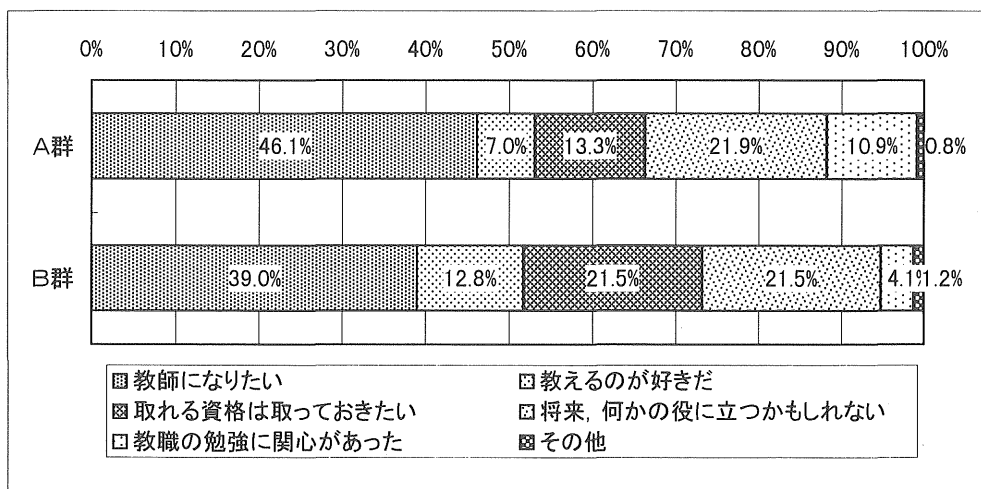


図1 教職課程の履修動機について(a)

将来何かの役に立つかもしれない」21.5%、「2. 教えるのが好きだ」12.8%の順であった（図1）。

動機について学年差は無いと考えていたが、実際には（有意差とはいえないまでも）「1. 教師になりたい」という積極的な理由はA群に多く、「3. 取れる資格は取っておきたい」という漠然とした理由はB群に多く見られた。これは、A群が実際に教育実習を体験し、進路の方向がほぼ決定している時期の調査であったことが影響していると考えられる。

(b)教職課程の履修動機について、用意した25項目の回答を考察する。回答の「非常に当てはまる」を5点、「当てはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点と点数化して、集計した。

まず、A, B両群の平均（標準偏差）とそのF-t検定の結果、ならびに回答比率の χ^2 検定の結果を表1にまとめた。この25項目の中には、(a)の調査に用いた選択肢と類似した項目があるが、

表1 教職課程の履修動機について(b)の平均、F-t検定、回答比率の χ^2 検定、因子パターン

質問項目	平均	SD	平均 F-t検	比率 χ^2 検	因子I	因子II	共通性
13. 教師は一生打ち込める魅力的な職業だから	3.7	1.08	>>	>>	0.850		0.725
5. 教師の仕事に関心を持っていたから	4.1	0.95	>>		0.766		0.600
25. 教師になりたいので教員免許状が必要だから	3.8	1.23			0.745		0.557
11. 教師の仕事が自分に向いていると感じたから	3.3	1.07	>		0.733		0.552
4. 生徒に教えるのが好きだから	3.9	0.97	>>	>	0.695		0.496
16. 教師になるのが小さいころからの夢だったから	3.3	1.33	>>	>	0.684		0.469
21. 教職を通して生徒の成長にかかわりたいから	3.6	1.11	>		0.656		0.435
22. 教師は生徒と接触できる職業だから	3.7	1.07	>		0.620		0.388
3. 努力すれば教師になれると思ったから	3.6	1.07			0.613		0.381
18. 中学や高校に尊敬する先生がいたから	3.9	1.20			0.561		0.321
14. 教師は自分の専門を活かせる職業だから	3.6	1.04			0.545		0.357
10. 教育が一番重要なテーマだと考えたから	3.0	1.13	>		0.505		0.280
24. 教師になると自分が向上できると考えたから	3.6	1.06	>	>	0.495		0.317
1. 教員免許状が将来必ず役立つと思ったから	4.1	0.95			0.387		0.170
9. 教師になると好きな勉強が続けられるから	2.8	1.17			0.344		0.223
15. 教員免許状を持っていると社会から信用されるから	2.7	1.05				0.763	0.582
19. 教員免許状は価値の高い資格といわれるから	2.8	1.09				0.751	0.564
12. 教員免許状は企業に就職するときにも有利だから	2.5	1.11	<<	<<		0.562	0.357
2. 教師は社会から高く評価される職業だから	2.8	1.00				0.548	0.397
8. 教師は比較的自由な時間のある職業だから	2.3	1.01		<		0.516	0.267
7. 教員免許状は卒業と同時に取得できる資格だから	3.3	1.24		>>		0.499	0.273
20. 教師になることが親の希望だったから	2.0	1.12				0.487	0.237
6. 友人や先輩が教職を目指していたから	2.0	1.07				0.462	0.216
17. 教師は男女平等に扱われる職業だから	2.9	1.12		>		0.393	0.263
23. 大学在学中に教育実習を体験したいから	3.2	1.25	>>	>		0.309	0.132
			因子寄与		6.234	3.326	

>>: $p < 0.01$, >: $p < 0.005$ (A群の方が肯定的)

<<: $p < 0.01$, <: $p < 0.005$ (B群の方が肯定的)

A群とB群のどちらが肯定的かを見ると、(a)とは逆の結果になっているものがある（例えば項目7,25など）。これは、(a)では6つの理由を比較して選択しているのに対し、(b)ではそれぞれの項目についてどう思うかを回答していることによる違いと考えられる。ここでは(b)の結果についてのみ考察する。なお、表1に示してある各項目の平均は、A・B両群を併せたものである。

回答の平均と比率の双方に2群間の有意差がある項目で、A群の方が肯定的なのは「4. 生徒に教えることが好きだから」「13. 教師は一生打ち込める魅力的な職業だから」「16. 教師になるのが小さいころからの夢だったから」「23. 大学在学中に教育実習を体験したいから」、A群の方が否定的なのは「12. 教員免許状は企業に就職するときにも有利だから」であった。これをみると、A群の方が教師という職業に強く惹かれて履修した様子が見えるが、実際に教壇に立ったことでその思いが強くなり、回答に影響を与えた可能性も否めない。

周囲の人物の影響を見ると、「18. 中学や高校に尊敬する先生がいたから」は高い割合で肯定され、多感な時期の恩師の影響が少なくないことが示されているのに対し、「6. 友人や先輩が教職を目指していたから」「20. 教師になることが親の希望だったから」は否定され、家族などの影響が低いことがわかる。

次に、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、2因子を抽出した。A・B両群の因子得点の平均をF-t検定したところ、因子Iには危険率1%未満で有意差が認められた。

因子Iは、「13. 教師は一生打ち込める魅力的な職業だから」「5. 教師の仕事に関心を持っていたから」「25. 教師になりたいので教員免許が必要だから」などの項目が含まれている。肯定されている項目が多く、特にA群にその傾向が強い。因子Iは自分自身の興味や適性による動機から構成されているので、『資質的動機』因子と解釈した。

因子IIは、「15. 教員免許状を持っていると社会から信用されるから」「19. 教員免許状は価値の高い資格といわれるから」「12. 教員免許状は企業に就職するときにも有利だから」など、主に社会的評価に関する動機から構成されている。そこで、因子IIは『社会的動機』因子と解釈したが、ほとんど重視されていない。

2. 教員採用試験の受験の意志について

教職に就くために教員採用試験を受験するかどうかを4つの選択肢から選んでもらったところ、A群とB群の回答比率に有意差が見られた ($\chi_0^2=24.9$, $df=3$, $p<0.01$)。A群は「4. 教員採用試験を受けるつもりはない」36.7%、「1. ぜひ教職に就きたいので、教員採用試験を受ける」33.9%、「2. できれば教職に就きたいので、教員採用試験を受ける」27.5%、「3. あまり教職に就きたくはないが、教員採用試験を受ける」1.8%という結果であった。B群は「2. できれば教職に就きたいので、教員採用試験を受ける」43.3%、「1. ぜひ教職に就きたいので、教員採用試験を受ける」34.0%、「4. 教員採用試験を受けるつもりはない」13.3%、「3. あまり教職に就き

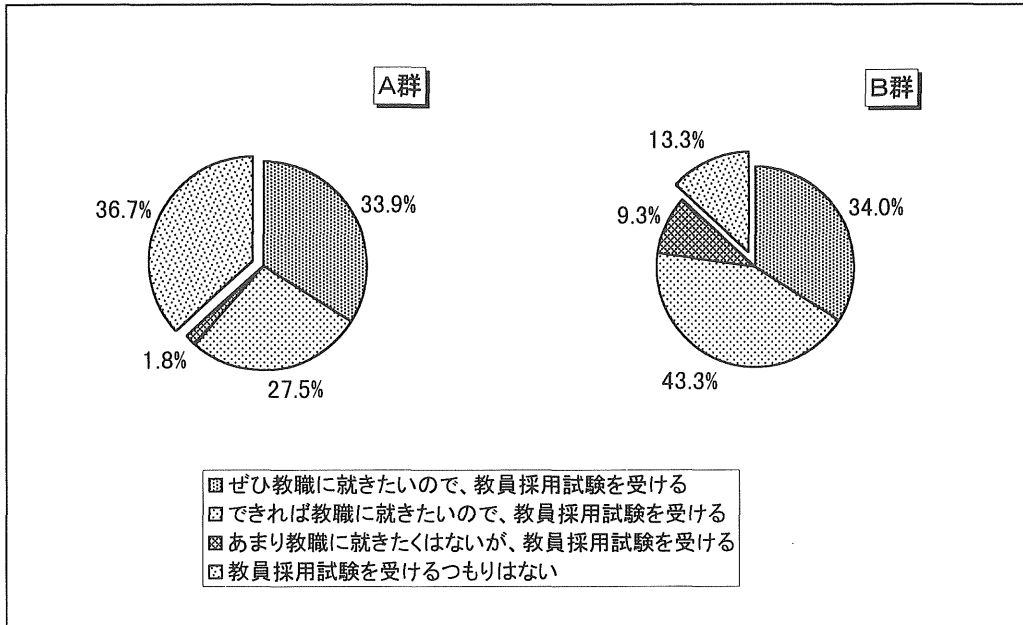


図2 教員採用試験の受験の意志について

たくはないが、教員採用試験を受ける」9.3%という結果になった（図2）。

両群の回答結果から、進路の方向をほぼ決定しているA群の方に、教員採用試験の受験目的を明確にとらえている様子がうかがえる。

3. 教育実習終了後の意識について

教育実習を終了した後の4年生103名の意識構造について、「非常にそう思う」に5点、「そう思う」に4点、「どちらともいえない」に3点、「そう思わない」に2点、「全然そう思わない」に1点を与えて点数化した25項目の回答比率、平均ならびに因子分析の結果を表2に示した。

平均を見ると、教育実習そのものとは直接関係の弱い「不安」を示す2項目、すなわち「9.大学の授業に出られないのが不安だった」「20.就職活動もしたかったので不安だった」の得点が低い。しかしこの2項目は標準偏差が大きく、同じように標準偏差の大きい「24.教員採用試験を受験しようと思った」と考え合わせると、前問で「教員採用試験を受けるつもりはない」と回答した学生の中には、就職活動等に不安を感じている者がかなり含まれると思われる。また、「10.毎日の服装に気がついた」「1.実習期間は丁度よかった」「16.やっと終わってほっとした」についても、回答にバラつきが見られる。「3.授業は思ったよりうまくできた」「13.自分は教師に向いていると感じた」の回答はやや控えめであるが、その自信のなさが間接的に「21.指導の先生はすごいと思った」という項目の得点に反映されていると思われる。

表2 「教育実習」終了後の意識についての平均（SD）と因子パターン

質 問 項 目	平均	SD	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性	
17. 授業をもっとやりたいと思った	3.92	1.045	0.740				0.627	
13. 自分は教師に向いていると感じた	3.46	1.046	0.705				0.677	
7. このまま教師でいたいと思った	3.93	1.174	0.676				0.575	
6. 毎日が楽しかった	4.22	0.839	0.602				0.454	
24. 教員採用試験を受験しようと思った	3.67	1.368	0.568				0.410	
20. 就職活動もしたかったので不安だった	2.58	1.432	-0.331				0.214	
2. 毎日疲れてしまった	3.64	1.101	-0.375				0.141	
9. 大学の授業に出られないのが不安だった	2.30	1.349	-0.530				0.288	
16. やっと終わってほっとした	3.25	1.311	-0.605				0.400	
14. 学校という組織がよくわかった	3.92	0.848		0.633			0.478	
4. 積極的に生徒に話しかけた	4.02	1.057		0.627			0.434	
15. 生徒の名前を覚えた	3.87	1.109		0.581			0.395	
19. 先生同士の人間関係がよくわかった	4.10	0.839		0.452			0.247	
25. 実習中に毎日予習した	4.23	1.086		0.364			0.187	
23. 校長先生は教職員をうまくまとめていた	3.50	1.074		0.361			0.205	
3. 授業は思ったよりうまくできた	3.25	1.169		0.328			0.293	
18. 教職員の指示にはきちんと従った	4.34	0.847			0.543		0.411	
22. 生徒の気持ちを考えるようになった	4.25	0.737			0.456		0.383	
12. 他の実習生と仲良く実習できた	4.55	0.825			0.436		0.285	
10. 毎日の服装に気がついた	3.33	1.346			0.414		0.282	
11. 実習手帳への記入が大変だった	3.98	1.066			0.387		0.238	
1. 実習期間は丁度よかった	3.01	1.256			0.310		0.119	
21. 指導の先生はすごいと思った	4.30	0.916				0.736	0.566	
8. 指導の先生が親切でうれしかった	4.14	1.103				0.448	0.395	
5. 実習校への手続きが面倒だった	2.89	1.084				-0.448	0.342	
			因子寄与	3.613	2.268	1.848	1.316	

つぎに主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、4因子を抽出した。

因子Iは、「17. 授業をもっとやりたいと思った」「13. 自分は教師に向いていると感じた」「7. このまま教師でいたいと思った」などのプラス項目と、「16. やっと終わってほっとした」「9. 大学の授業に出られないのが不安だった」などのマイナス項目から構成されている。因子Iに含まれる項目は、教育実習に積極的な姿勢で取り組み、適性の発見に結びつくような達成感の強い項目なので、『教職への適性度』因子と解釈した。

因子IIは、「14. 学校という組織がよくわかった」「4. 積極的に生徒に話しかけた」「15. 生徒の名前を覚えた」など、学校の組織・人間関係への理解などを含め、教育実習を通して2次的に達成できたことへの満足感を表す項目で構成されているので、『実習への満足度』因子と解釈した。

因子IIIは、「18. 教職員の指示にはきちんと従った」「22. 生徒の気持ちを考えるようになった」など、実習期間中に毎日心がけていたことを述べた項目によって構成されているので、『実習中の協調度』因子と解釈した。

因子IVは、「21.指導の先生はすごいと思った」「8.指導の先生が親切でうれしかった」など、直接関わり合いを持った教員に対する敬愛を表しているので、『教員への敬愛度』因子と解釈した。

なお、今後は共通性が低い項目の見直しなどを検討していきたい。

IV. 要 約

本研究は、以下のようにまとめることができる。

- (1) 教職課程を履修した動機は、自分自身の興味や適性による『資質的動機』因子と、主に社会的評価に関する『社会的動機』因子で説明される。
- (2) 『資質的動機』には高い肯定率を示した項目が多く、特に「教育実習」を既に経験した学生の方にその傾向が強い。しかし、実習の経験が回答に微妙な影響を与えた可能性も否定できない。
- (3) 「教育実習」終了後の学生の意識は、教育実習に積極的な姿勢で取り組み、教職への適性の発見に結びつける『教職への適性度』因子、教育実習を通して2次的に達成できたことへの満足感を表す項目で構成されている『実習への満足度』因子、実習期間中の毎日の心がけを示す『実習中の協力度』因子、直接関わり合いを持った教員に対する敬愛を表す『教員への敬愛度』因子とで説明される。

【付記】本研究は、平成13年度城西大学学長所管研究奨励金の交付を受けて実施された研究の一部である。